

# いつも自然とふれあえる幼稚園・保育所 ドイツの園庭ビオトープ視察ツアー2011

－ 実施レポート －

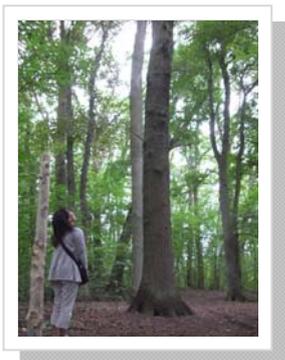
視察企画 (財)日本生態系協会  
後援 (社福)日本保育協会、(社)全国私立保育園連盟  
協力 (株)ジャクエツ、(株)チャイルド本社、  
ひかりのくに(株)、(株)メイト

2011年8月15日～8月21日の7日間、「いつも自然とふれあえる幼稚園・保育所ードイツの園庭ビオトープ視察ツアー2011」を実施しました。

ツアーには、幼稚園・保育所の設置者や保育者、研究者など、全国各地から23名の方々が参加しました。

子どもたちが健やかに発育するためには自然とのふれあいが不可欠と考えられているドイツでは、「園庭ビオトープ」を設置する幼稚園・保育所が増えています。身近な自然とのつながりを持ち、変化に富んだ「園庭ビオトープ」で、子どもたちは五感を使ってのびのびと遊び、豊かな感性や協調性を育てていきます。

そこで今回のツアーでは、自然と共存したまちづくりが進められ、子どもたちへの環境教育も盛んに行われているハンブルク州、ブレーメン州を訪れ、自然いっぱいの園庭を持つ幼稚園・保育所や州の環境学習施設、自然に近い形でつくられた公園などを視察してきました。



## AWOホーエンブーヘン 幼稚園・保育所

民間福祉団体であるAWO（アーヴォ）の地域組織が運営するこの園は、昔は農家として使用されていた建物を改築してつくられました。1haという、ハンブルク市内でも指折りの広さを誇る園庭には、プラスチック製の遊具ではなく木でつくられた落ち着いた色合いの遊具が並んでいました。また、地域の自然の植物でつくった茂み、虫たちのホテルを通じて、子どもたちは遊びながら自然について感心を高めていました。



## カールスヘーエ環境センター

子どもたちに自然体験の場を提供するために設置された州の施設を訪問し「子どもたちはなぜ自然を必要とするのか？」というテーマで、自然いっぱいの園庭の必要性についてお話を伺いました。この施設では「子どもたちの健康の増進、知覚や社会性の発達のために自然の中での遊びは不可欠である」との考えのもと、子どもたちの日常的な自然とのふれあいを推進していました。

また、この他にも、再生可能エネルギーの利用などの取り組みや、その取り組みを推進するハンブルク市からの支援体制などについてもお話を伺いました。



## アム・ジョーダン幼稚園

この園では「自然の中で遊び、体験することで自然を学ぶ」ことをコンセプトに、保護者と協力して自然がいっぱいの園庭をつくり上げました。地域の自然にもともとある植物でつくったトンネルや虫たちのホテルなど、自然とふれあう場所が豊富に設けられた園庭では、子どもたちが木登りをしたり、枯れ木で工作をしたり、自然の素材を生かしたさまざまな遊びをしていました。現在この園庭での取り組みは、周辺の小学校などへも広がりを見せています。





## ローンホルスト幼稚園

1.2haの広い園庭では、子どもたちが自由に走り回り、木登りを楽しめます。園庭に設置された遊具は全て木で作られ、子どもたちを包み込む暖かなぬくもりを感じさせました。この園では地域にあるエコステーションのスタッフの協力を受けながら広い敷地を利用した自然体験プログラムを行っており、子どもたちは豊かな自然の中で、遊びながら自然の大切さを学んでいました。



## マルセル幼稚園・保育所

子どもたち、保育者、保護者が集まり、意見を出し合っにつくられた園庭には、海賊船に見立てた滑り台など、子どもたちが喜ぶ工夫がいっぱいです。地産地消をコンセプトに作られたこの園庭では点々と置かれた大きな石も近隣の地域から取り寄せたものでした。「輸送にかかるコストやエネルギー消費を考えれば近隣の資材を使うべき」との園庭設計者の言葉には深く考えさせられました。

また「大きな石を園庭に置くのは危険なのでは?」という参加者からの質問に、「子どもたちは危険を感じると本能的に注意深くなり、ケガをすることがなくなる。むしろ何も無い場所の方が油断してケガをする子どもがふえる」と答えていたことも印象的でした。



## こびとの国幼稚園

限られた面積でも、工夫によって子どもたちがのびのびと遊べる園庭をつくることのできる例として、この園を視察しました。200㎡ほどの面積の園庭ですが、子どもたちが飛んだり跳ねたり活発に動くゾーンと、砂場などの一人静かに過ごすゾーンとに分けられ、ストレスを感じないよう工夫されていました。大きな木は植えられませんが、その代わりに、ゾーンごとの仕切り部分や花壇などには地域の自然に生える草花を植え、子どもたちはそこに集まる虫などを観察することで、自然への関心を高めていました。空間の使い方によって限られた面積の園庭でも、さまざまな体験の場を創出できることに、参加者の皆さんは感激していました。

こびとの国幼稚園は園庭の敷地の一部を隣接する企業から借りています。教育機関に対する援助が企業のイメージアップにつながることで、ドイツでは当然のこととして考えていることを実感しました。



## ラーラント城塞公園

この公園は「子どもたちにとって必要な公園をつくろう」という考えのもと、芝生の広場から、起伏に富み、地域の自然の草や木が豊かに育つ公園につくりかえられました。そして、金属やプラスチック製の遊具も撤去されました。公園の造成を指導したのはプレーメン市の青少年局で、周辺に住む子どもたちや公園に遊びにくる子どもたちにアンケートを行い、どんな公園をつくってほしいか意見を聞きながら、地形に合わせて草原や低木の茂みなど、さまざまなタイプのピオトープを創出しました。



## ハルプシュテッド集会所

### 『休暇の家』

地域の教会が所有するこの集会所では、子どもたちのために自然豊かな庭をつくりあげました。人工的な遊具が取り除かれた庭では、120種類もの地域の自然の植物が元気に育っています。庭の一角には、実のなる木や虫たちのホテルもありました。子どもたちはこの庭で遊ぶことで、自然が大好きになっているとのことでした。

自然がいっぱいの庭づくりから2年が経過しました。この集会所では、今後も更に子どもたちが自然にふれあえるよう、いろいろな工夫をしていきたいと希望にもっていました。



## 森の幼稚園フクス・ウント・ハーセ

ブナなどの落葉樹が茂った明るい林が子どもたちの遊び場です。子どもたちは、想像力を駆使してさまざまな遊びを発明します。この日も枯れ木の枝や切り株を、海賊船や小屋、楽器に見たてながら、広い林の中を自由に駆け回っていました。子どもたちは、こうして四季の変化を肌で感じながら、豊かな感性と森の生きものへの大きな愛情を育んでいくそうです。



## +++ 視察を終えて +++

今回のツアーでは、子どもたちが木登りやかけっこをする広い園庭、限られた面積ながらも工夫をこらして、子どもたちがさまざまな自然体験ができる園庭、子どもたちが自然を大好きになる拠点としてつくられた施設や公園など、たくさんの事例を見ることができました。どの事例でも共通していたのは、保護者や保育者など保育に関わる人々が「子どもの健やかな成長のために何が必要か」を第一に考え、その結果として自然がいっぱいの園庭づくりに取り組んでいることでした。

こうしてつくられた園庭には、ただ地域の自然が取り入れられているというだけでなく、子どもたちの知覚や創造力を最大限に伸ばそうとする工夫が随所に施されていました。そのような庭で子どもたちが駆け回り、木に登り、おままごとをしておまじないをしながら遊んでいる様子が印象的でした。

さらに、今回のツアーでは自然をふんだんに取り入れた公園や園庭ビオトープのデザインなどを行う景観設計士（日本ではビオトープ管理士）の方に同行していただき、設計をする側の視点でのお話をうかがうことができました。そのお話から、面積の大小に関わりなく、子どもたちがのびのびと遊べ、地域の自然への理解を深められる園庭をつくることできるということを教わりました。また、「保育者が自然について理解していなければ、どんなに工夫を凝らした自然いっぱいの公園・園庭を設計しても、その意味を子どもたちに伝えることができない。だから保育者を目指す人には、子どもたちのために自然について勉強してほしい」という言葉に、保育者が自然についての正しい知識や考え方を身につけることの重要性を改めて感じました。

今回の視察を通じ、参加者からは「常に自然と関わっていることの素晴らしさや大切さを実感した」「自分の園でも、できることから始めようと思った」といった感想が寄せられ、日本での新たな活動への熱意が感じられました。

私たちの協会では、ヨーロッパ、アメリカに事務所をおき、自然の保護や再生、環境教育などに関する世界各国の取り組みについて、常に新しい情報を収集しています。ご要望があれば、個別に視察ツアーを企画しコーディネートすることも可能です。お気軽にご相談ください。



参加者のみなさん